

淨土

1989-6

第五十五卷

六月号

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 每月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別扱承認雑誌）第三二五号
平成元年五月二十五日印刷 平成元年六月一日発行



六月の秀句

六月の風吹き抜けた絵馬屋あり

外川 飼虎

青梅雨のひと日ひとりの釜かけて

亀山 恒子

青うめの青しんと暗き土間

真光 葉舟



||| 六 月 号 |||



一切諸仏に共に護念せられて、皆阿耨多羅三藐三菩提を退転せざることを得む。

——『阿弥陀經』

目 次

<ずいそう…「つくづく法師抄」>

苦を生きる……………眞 野 孝 信……(2)

——素顔の人生——

《特別寄稿》

理想世界、譚単曰訪問記……………後 藤 真 康……(16)

童話の世界〔Ⅲ〕

音(その三)——「ポトポトポトってなんの音」…ぬのむらてつや……(24)

新「生死一如」への提言(下)……………藤 木 雅 清……(9)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <27>

海と山の狭間で

……木 下 隆 一 ……(30)

——我が思い出に住む犬たち(13)——

◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(6)

……………松 浦 行 真……(37)

——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

◇◇すいそう……「つくづく法師抄」◇◇

苦を生きる

—素顔の人生—



眞野孝信

(八幡市正法寺住職)

六月に入る。思えば、落花惜しまれる間に、若葉はやわらかな日射しを受けて、新緑日毎に鮮かさを増す大自然は、正に書かざる経を読み聞かせる。この偉大な摂理は、一抹の寂寥感(ものさびしさ)を与えつつ、他面には、これを打ち消すような生き生きとした息吹の

旋律で活精の譜を奏でて、共に諸行(万有)の無常を告げ、頬を撫でる薫風は幟の鯉を大空に泳がせて夏を呼ぶ。こうして日に更たに日に新しい月日の流れは、人夫れぞれの想いに対応して音無く語りかけてくれる。「諦聴せよ!」「諦観せよ!」「諦語せよ!」と。諦

とは眞實にして虚妄（あやまり）でない「あきらめ」の意味で、真心をもって実直に自身を見詰めることへの勸説ではなからうか。大自らは素直に去来して作為（つくりごと）のないのが素晴らしい。

仏教には、安居（梵語 *vāṣṭika* の訳で雨期の意）と謂う行事がある。これは、雨安居とも夏安居ともいわれる修行で、印度において所謂雨季に入ると幾日も降り続く霖雨の中を遊行（僧が諸国を巡る行脚）することは、草木の繁茂や生物の活動を害すると共に、遊行の不便もあるので、精舎（僧が仏道修行する屋舎）に籠って修行に精進するのであるが、邪執（つまらぬことに執着する）の念を払拭し、仏の教えに順じた生活の実践を誓って発願入行するのである。吾が国でも、六月には夏安居、十一月には冬安居、の行事があつて、教学上の講習会や教化上の講習会を開催し、特に浄土宗にあつ

ては、別時念仏を修すことは大切な行事であるが、この機会に、私は素顔の人生を考えてみたい。

私達は、誰彼なしに、後にも前にも二人とは居ない唯独りの人間として、而も二度とない今日を生きている。再度来ることのない路に私の足跡を遺して、寸前分たぬ無常の世を渡り行く旅人である。その路は細くとも太くとも如何に曲折があろうとも、私の歩む唯一筋の道なのである。その道程は誰にもわかっていないが、その道行が二度とないせつかくの人生だから、仮令覺束ない足取でも、その一步一步の運びは大切にしたい。他人もそうであるように、私は私ながらに、他に掛替のない独尊の自負を許され度い。独尊の自覚、それは威張ることでも我儘でもない、真摯な人生の価値観であり使命の根源である。ただ心をいたすべきは独尊の自覚に根ざす行跡、

それに相應しい生いそ態にこそ、自策自勵とともに
に仏慈の光益（仏の大慈悲をいただくお育て）を
至禱する行路でありたい。

釈尊は「人生は苦ない」と、人の世の現実
に即して四諦（苦諦・集諦・滅諦・道諦の四諦で、
諦とは、真実の理を明らかにして擲むこと）を説かれた。

これは勤苦（辛苦を超越しての精進修行）六年の
結果、悟を開かれた釈尊の最初の説法で、初はつ
転法輪と謂う。迷境（迷いの世界）を脱して悟
境（悟りの世界）への開導説法である。即ち、
人生にあつては、①誰もが経験する身心のさ
しせまった不安の状態である逼迫が苦である
ことを諦める（はつきりとつかむ）ことが苦諦
であり、②この苦の因（もとをなすもの）は、
惑（煩惱）が身に集積しているからであること
を諦めるのが集諦で、③煩惱を滅しつくさね
ば、苦を脱することはできないと気付くこと
が滅諦であり、④苦を脱した安楽と寂靜の涅槃

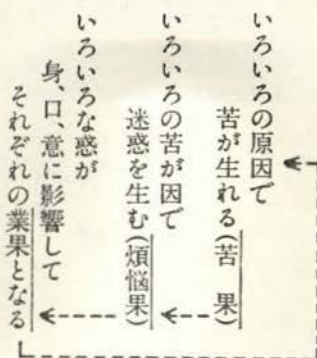
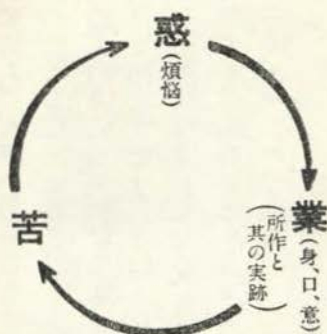
槃の世界（一切煩惱の繫縛を脱し、迷界に退転再生
する業因を滅した境地）に到達するための修行法
である道諦の必要を確認して、求道（仏道を志
求すること）への導きとされた。以上（①②③④）
が四諦の略述であるが、要するに苦、集は迷
界の果と因であり、滅、道は悟界の果と因を
説いて、迷境より悟境への転入を促し、解脱
への道の根本義を示されたものである。

本来、四諦の説明には、十二因縁、八正道
の関連づけが必要であるが、今は、「苦」に
ついてのみこれを略述する。「苦」の把握が
吾が身の現実の認識であり、苦界を度る方途
の探究こそが、実人生を生き遂げる指針を得
ることであり、拙い吾が人生に些少なりとも、
その意義と甲斐を見出したい。

苦輪と謂う仏教用語があるが、これは、苦
が因となって、その結果が輪転すること、
流転と云ってもよく、流（ながれ）は相続する

状態であり、転（ころび）は物が因縁によって生起（生ずること）することであるから、因が果を生じ、果が因となって次の果を生み、止

むことなしにぐるぐると輪廻を繰り返すのである。



惑と業と苦の三道が互いに通じて、惑より業に、業より苦に、苦より惑にと、互いに因となり果となって相通じ、輪転する三輪が苦輪である。貪欲、瞋、悲、愚痴等を根本とする煩惱道即ち惑道と、煩惱に由って発る所作

とその結果の業道と、業を因として生じた苦果である苦道の三道が、互いに因果となり相関連鎖して繰返しを続けているのが私達の生状態である。たとい束の間の楽を覚えることがあっても、「楽は苦の種」「楽あれば苦あり」

とも云って嘆息することもあるから、所詮「人生は苦なり」なら、寧ろ「苦が無くて、

此の世の味があるものか」と頑張るのがよいのではないか。とは云っても、淡味は^{うすあじ}まだしも、辛苦、極苦と、身に堪え切れぬ苦もある。畢竟、苦は言葉や文字では尽し得ない身心の^{ひつぎよう}逼悩である。人間の悶絶をも容赦なしに襲いかかってくる無相の狂鬼が、音もなく宿って、その人の身心を痛撃するような場合もあって、苦は当人でなければ解らない。その由^よって来る原因の類似をもって、他人が察することはできても、厳密には、人々各様でありケース・バイ・ケースである。

二苦

内苦―身の病みと心の憂い。

外苦―天災、刑罰、悪賊等々によって、外部から受ける身心の苦感。

苦は、法数的に分類して、二苦・三苦・四苦・五苦・八苦・十苦・十一苦・十六苦・十八苦・十九苦・百十苦等が説かれているが、根本的な分類の開同や特殊な修行上の目図、或は特異な観点からの分類等によるものである。

今、ここでは、学術上の研鑽論究を目的とするものでなく、実生活に即した身近なものを列挙して、苦の様態を教説に仰ぐこととする。大智度論に、「人身無常にして衆苦の藪^{やぶ}」と評述されているが、その現象や如何なるものであろう。

三苦

苦苦——身心の疾病、寒熱饑渴等の苦縁によって生ずる苦。
壊苦——樂事樂境の破壊によって生ずる苦。
行苦——無常の流転によって感ずる苦で、行は遷流（うつりかわり）の意。

生苦——果報（両親の業因による）の始めて起る生時の苦。

老苦——身体の衰変する老時の苦。

病苦——身心の傷病による病時の苦。

死苦——死滅の臨終時の苦。

四苦

（註）四苦は、人類のみならず、生類のすべてに及ぶ根本的な受苦とされている。

八苦

愛別離苦——愛するものと別れねばならない苦悩。

怨憎会苦——怨みや憎しみをもつものと会わねばならない苦悩。

求不得苦——求めるものが得られない苦悩。

五蘊盛苦——人間の身心を構成する要素の機能が盛んなための苦悩。

（註）五蘊（陰）は、色・受・想・行・識の五要素の集りを意味し、人間の精神と肉体はこの五蘊の仮和合であるとされていて、色は物質、受は感覚、想は知覚、行は意志、識は識別と、それぞれが分担機能をもって、行或は識が中心主体となって統括的に関連している。

五苦は、前掲の八苦の開同による分類が一般的であるが、特に「犯罪枷鎖苦」を加えて五苦とし、枷（くびかせ）や鎖（くさり）等の刑具をもつて受ける犯罪者の苦悩を強く印象づけている五苦説もある。「五道苦」として、六道の中の天道を除外して、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間の五道苦を五苦とする説もある。

十苦は、生老病死の四苦に、愁苦（愁傷時の苦悩）、怨苦（怨みを抱いた時の苦悩）、苦受（身心の逼悩する苦の痛感）、憂苦（心配ごとを抱えた苦悩）、病悩苦（身心の不調からおこる苦しみ）、流転大苦（絶えることなく次々と苦のおこる状態）の六苦を加えるもので、根本苦を角度を変えて開いたもので、観点と受け止めの相異による分類である。

苦について、一応の分類に基いてその数種を味つてみたが、苦の数や種類よりも、人生そのものが苦であることを納得した。その一々を実人生の体験と見聞による察しを通して、苦を脱することの不可能なことも解った。誰もが苦を抱えている。無頓着に生きる人、堅実に生きる人、人の生態にもいろいろあるが、水鳥が、水を離れず水に溺れず水面をゆく。水中に没して見えない足は常に水をかいて止まない。私達も苦からの離脱を欲することなく、苦の為に自らを殺すことなく、苦を生きる素顔の人生に、勿体なくも本願成就身の光益を蒙る常摂受を請願し、称名怠らず、今日を生きよう。

（了）

新「生死一如」への提言（下）



ふじ き が せい
藤 木 雅 清

（DES—臨死問題研究会会長
東京・中野区眞源寺副住職）

S・グロフの意識の作図学

スタニスラフ・グロフのホロトロピック・セラピーとその理論は、さまざまな精神障害の治療のために究明されてきたものだが、一見健康そのものと思われる人でも多かれ少なかれ持っている環境との不調和を癒し、人間本来が備えている「善性」を引き出し、

幸福に満ちた生活ができるようになる有力な方法でもある。これはあくまでも心理療法なのだが、その設定、分析、経過、結果において、驚くほど信仰（たとえば浄土教の信仰生活における変容）におけるそれと酷似している。とくに、分娩前後の心理領域理論、誕生と死の類似性の指摘は、本稿のテーマに多くの示唆をあたえるものである。

このS・グロフの方法は、基本的には、自分の精神的な障害（顕在化している精神障害者だけでなく、一見健康そうな人も含めだれにでもあるもので、日常生活にさまざまな影響を与えている）の原因をひとつひとつ解決するために「自伝的・回顧的レベル」↓「誕生と死の体験に関連する分娩前後の領域」↓「トランスパーソナルな領域」へと意識を旅させるのである。以下、この三つの領域についての理論を説明することとする。

一、自己治癒（感覚的障壁と回顧的・自伝的レベル）

まず、魂（精神）への旅がはじまるまえに通過しなければならぬ感覚的障壁（バリアー）がある。それは、過去において未解決のまま通過してきたこと（アンフィニッシュド・ビジネス）の再体験である。このいろいろな未解決なことが、さまざまな精神障害の原因であり、人間関係などに不都合を来している原因なのである。この人生のさまざまな時期に発する力学的な記憶の集合体（とそれにまつわる空想的素材）を、COEXシステム（Systems of Condensed Experience＝凝縮体験系）という。大半の自伝的COEXシステムは、誕生プロセ

スの特定の局面と力学的に結びついている（出生外傷Ⅱパース・トラウマ）。そして、分娩後のテーマや要素は、トランスパーソナルな領域に由来する。それに関連した体験的素材と特定のつながりをもっている。

二、自己実現（誕生と死との遭遇…基本的分娩前後のマトリックスの力学）

この無意識の分娩前後のレベルは、個人的無意識と集合的無意識、伝統的心理学と神秘主義との重要な境界面を表している。基本的分娩前後のマトリックスを、BPM=Basic Perinatal Matrics（一～Ⅲ）という。

△BPMⅠ…羊膜の宇宙√分娩前の子宮内存在時における胎児と母の有機体との原初的な共生的融合、全宇宙との合一体験（神秘的合一体験）、全被造物に対する深い尊敬と愛の気持。

△BPMⅡ…宇宙への吸引と出口なし√生物学的分娩の開始と分娩の最初の臨床段階に関連、宇宙への吸引（被験者は世界を被害妄想的に解釈する傾向が強い）、閉所恐怖症的な悪魔的世界。このマトリックスのプリズムを通すと、人生は、まったく無意味で不合理的な劇、非現実的な役者や心をもたないロボットが登場する茶番劇、残酷なサーカスの余興のようなものに見える。

△BPMⅢ…死と再生の葛藤√産道の破壊的力によって生存がおびやかされる有機体の生

物学的怒りを反映、ティーターンの闘争、サド・マゾの体験、強烈な性的興奮、悪魔的出来事、糞便嗜好、火との遭遇といった要素。ここでの状況は絶望的ではなく、被験者は無力ではない。被験者は積極的に関与し、苦しみが明確な方向性と目標を持っているという感覚を抱く。死と再生の葛藤の体験は苦悩と法悦の境界線および両者の融合を表している。生理的緊張の末に突然の解放と弛緩をもたらす生理的活動に結びついている。

△BPMⅣ：死と再生の体験▽突然の解放と弛緩（その緒が切断された後、母の有機体からの身体的分離が完了する）、死と再生の体験（死と再生の葛藤の終了と解決）。逆説的だが、現象的に解放の体験にもう一步というところでありながらも、個人は差し迫った恐ろしい破滅感に襲われる。これはしばしば、そのプロセスを止めようとする絶望的なあがきを招くことになる。もしBPMⅢからⅣへの転換が許されれば、そこには想像しうる限りのあらゆるレベルにおける破滅感（身体的破壊、情緒的苦痛、知的・哲学的敗北、究極的倫理の挫折、超越的な絶対的呪詛）が含まれる。この「自我の死」の体験は個人の人生におけるそれまでのすべての参照点の、情容赦のない即時的な破壊を伴うように思われるフロイト的な精神分析の影響下では、自我という概念は、現実を検証し、日常生活のなかでしかるべく機能する能力と密接に関連している。

こうした限られた見方を共有する個人は、「自我の死」という観点を恐怖をもって見つめる。けれども、このプロセスで実際に死ぬのは、出生時の被験者の否定的体験を反映する基本的に偏執狂的な世界に対する姿勢（自分に能力がないという感覚、危険に備えたいという

欲求、自分のものにして制御したいという衝動、自分自身や他人に認めさせようとする努力、その他、問題のある同様の要素などである。自我の死を特徴づける破滅や「宇宙の奈落に落下する」体験は、即座に、超自然的な輝きと美を具えたまぶしい白光や黄金の光に取って代わられる。被験者は霊的な解放、償い、救済の奥深い感覚を体験する。死と再生の体験の元型的象徴は、集合的無意識の多様な領域から引き出されうる。なぜなら、あらゆる主要な文化はこのプロセスに対応するしかるべき神話的形態をもっているからである。

三、自己超越（脳を超える旅・魂のトランスパーソナルな次元）

死と再生の体験的プロセスは、一般にトランスパーソナルと呼ぶのがもっともふさわしい、人間の魂の超自然的領域に通じる扉を開く。共通の特徴は、意識が通常の自我の境界を超えて広がり、時間と空間の限界を超越するという被験者の感覚である。個人と世界との境界が固定されておらず、絶対的なものではないことを示唆している。特殊な状況下では、宇宙全体を含む、宇宙のすべてのものと体験的に同一化することが可能である。トランスパーソナルな体験は深層の個人的自己探究のプロセスで起るが、それらを単に慣習的な意味の精神的現象と解釈することはできない。それらは一方では自伝的・回顧的体験や分娩前後の体験と境目のない連続体を形成し、他方では習慣的に定義される個人の範囲を明らかに超える情報源に、感覚器官の介入なしで、直接触れているように思われる。ト

ランスパーソナルな領域の存在が確認されれば、心理学と超心理学とのはっきりした境界は消え失せるか、少なくとも任意なものとなる。非日常的な意識状態では物質世界を正確に映し出すトランスパーソナルな体験が、西洋的な世界観では客観的リアリティの一部とみなされていない内容を含む体験と密接につながりあった同一の連続体として現れる。これは明らかに、いまだ説明されていない仕方、一人一人の人間が全宇宙や全存在の情報を含んでいること、宇宙のすべての部分へ体験的に接近しうる潜在的可能性をもっていることを示唆している。

誕生と死の類似性

超常体験などは例外だが、われわれは母親の胎内にいるときから出生までのことを記憶してはいない。しかし、前回紹介した仏教の「生苦」とS・グロフの理論がいかにか酷似していることか。このことは、われわれの意識下に埋没している、それゆえにわかりにくい「生苦」理解のヒントになるのではないだろうか。

また、BPMⅢ、Ⅳのレベルでの葛藤、苦悩の様子が、死に臨んでいる人のそれと驚くほど似ているということは、何を意味しているのだろうか。つまり、誕生直前、頭は狭い産道に締めつけられ、どうなっていくのかわからない。その状態がどんどん高まり、いよいよもうダメだと思った瞬間、オギャーと叫んだ瞬間（すなわち、胎内での生涯の終焉）、す

ばらしい世界に誕生したことになる。このプロセスを死の不安におびえながらこの世を去り、極楽へ往生してはじめて気づく（月影を「ながむる人」となる）ことと比較するのは無理だろうか。そういう意味で、「ショウジ一如」を理解するのはいけないだろうか。

とはいっても、△信▽の立場からいえば、S・グロフの理解も「生死一如」もどうでもいいことだ。ただ、頭でわかろうとする人、理論的に理解しようとする人には、アメリカの新進心理学者が説く「死は怖くない」「それが理解できれば素直になれ」「他人にやさしくせずにはいられなくなる」理論は魅力的なのではないだろうか。仏教語を使わずに仏教を説けるのではないだろうか。

そのために、筆者はあらためてこう提唱したい。「生死一如」（誕生と死は同じ体験、恐れるに足らず）と。

（了）

△参考文献▽

『自己発見の冒険「1」』——ホロトロピック・セラピー——スタニスラフ・グロフ著、春秋社、一九八八年一月二五日。

『トランスパーソナル心理学の理論と実践』吉福伸逸講義録、C+F研究所、一九八八年四月一〇日。

獄についての記載は大変詳細で変化に富んでおり、まさにこれでもか、といった感じがする。それに比べて天国等の理想世界の記述はどうも画一的で具体性に乏しいようだ。これはキリスト教やマホメット教でも同じようである。その点、鬱単曰の話は珍しいものといえよう。

須弥山世界では中央に須弥山（妙高）という巨大な山がそびえており、その周囲を七層の山脈と大河がとりまいて、その外側が海（四大海）となっている。四大海のなか、須弥山の四方に四つの大陸があり、これらはそれぞれ特徴がある。東は東勝身洲で半円型をしており、ここの住民はその名のとおりで体が大きいのが特徴である。西遊記の孫悟空はこの傲来国花果山に生まれたことになっている。どうりで猿のくせに大変な豪傑である。南にあるのが南胆部洲（閻浮堤）で三角形をしており、ここが我々人間の住んでいる世界である。閻浮堤の名は閻浮樹という樹木が多いからだそうだ。西の西牛貨洲は円形で、牛がたくさんいるのが特徴である。北にあって四角な形をしているのが北俱盧洲（鬱単曰、鬱単越）である。南胆部洲に猫牛洲と勝猫牛洲の二中洲が付属しているように、他の大洲にも二つずつの中洲が付属している。東西の二洲にはあまり詳しい説明がないが、長阿含経では特に一章（鬱単曰品）を設けて北俱盧洲のことを詳しく説いている。それはここが人間の住む世界では一番安楽な世界だからである。ウッタラとは「最上」という意味だそうである。それでは、主に長阿含経の記載に従ってウッタラクル訪問に出掛けるとしよう。

ウッタラクルの景色

ウッタラクルを遠くから眺めるとき、まず目に映るのは四角い大地に連なる緑に包まれた美しい山脈です。段々近付いていくと、山の間に大きな河が流れ、広い平野や森林のあるのが見えてきます。ウッタラクルに上陸してまず驚かされたのは地面が柔らかいことです。蒼く柔らかい草が地面をおおっていてまるで厚い絨毯を敷き詰めたようです。歩むにつれて足が四寸も沈んでしましますが、人が歩み去るとまた元にもどるのです。草の下の地面は細かい宝石のようで大きな石ころはなく、しかも油をまいたようにしっとりとしていて埃がたちません。

まず森に入って見ましょう。地面は平らで荊や木の切株や隠れた溝など歩く邪魔になるものがないのでずんずん歩けます。いい香りがします。これは香樹という木があって、その実が芳香を放っているのです。森にはこのほか色々な木があって美しい花を咲かせています。その果実もさまざまで、あるもの（衣樹）はそのまま衣服となり、あるものは各種の装身具となり、あるものはもろもろの器となります。無数の鳥たちが鳴き交わし、音楽のようです。音楽といえば、楽器樹という木は実が種々の楽器なので、音楽好きの人は自由に取って奏でて下さい。

爽やかな風ですね。ほんとに気分が壮快になります。ここは四季を通じて温暖で、夏も冬も無いのです。森と草原の間に清らかな流れがさらさら音をたてています。水はよく澄

んで底にも泥がたまっています。落ちた花びらが水の面を覆って流れてゆきます。水をすくって口にふくんでごらん下さい。冷たくてなんともいえない味わいでしょう。実はこの土地にはあの天竺に一つしかないという阿耨達池（無熱惱池）が四隅に一つずつあって、そこから八功德水が四つの大河となって流れ出し、細かく別れて全土を潤しているのです。

ウッタラクルの生活

むこうに大きな門が見えてきました。庭園の入り口です。入ってみましょう。中央に綺麗な池があります。池には舟が浮かんでいます。この土地にはこうした庭園がたくさんあるのです。泳ぎたくなったら遠慮なく裸になって水にお入りください。実はこの住人たちも水浴びが大好きなのです。彼らは衣服を岸に脱ぎすてて水に入り、存分に泳いだら岸にあがって、そこにある衣服をどれでも構わず身に着けます。ここでは自分の物は他人の物、他人の物は自分の物なのです。衣服が足りなければ先程の森林に行き、香油を取って身を清め、衣樹などから衣服や装身具を取って身を飾ればよいのです。

遊びつかれたら林の中にひっくりかえり、一眠りしましょう。蚊にさされる？ そんな心配はご無用。ここには蚊や蠅やむかでや毒蛇などの害虫、虎や豹などの猛獣は一切いないのです。夕立に合わないか、ですって。ここでは雨は夜にだけ降ります。曲窮樹（カウキ）という樹が葉を一杯に茂らせていますから、雨の時はその下で休めばよいのです。水はけがよいので雨のあと地がぬかるむということはありません。

お腹がすぎましたか。ではもう林を出しましょう。その畑に稲が実っているでしょう。この稲は耕さなくても一年中自然に生えてくるのです。実をよくご覧なさい。穀もぬかない白米なので、そのまま蒸して食べられるのです。すばらしくいい香りで舌がとろけるほどおいしいですよ。蒸すのに火を焚く必要はありません。摩尼珠^{まにじゆ}という宝石を釜の下におくと、自然に熱がでて釜が煮立つのです。それとも、もう少し歩いてみましょうか。だれかこの土地の人が炊事をしているのに会おうでしょう。ここではだれかが炊事をしているとき、通りかかった人はだれでもご相伴にあずかれるのです。ピフテキが食べたい？ それは我慢して下さい。ここの人達はみんなベジタリアンで肉食の習慣が無いのです。ここのお米だけを食べていれば十分に栄養がとれ、病気にもかからないのです。食べる物を食べたら、出す物を出したくなつた？ どうぞ、そこらの草むらで用を足して下さい。地面に自然に穴があき、用がおわるとまたふさがってしまったでしょう。ここではゴミ公害の心配なんてないのです。

ウッタラクルの人達

この土地へよそから来た人達がまず戸惑うのは、ここに住人たちがみんな同じような顔をしていることでしょう。私たちの二十歳くらいの顔立ちで、実に清らかで円滑な人相をしています。その筈です。ここの人達はみんな他の土地で、不殺生、不窃盗、不邪淫などの十の善行を行ってきた人達の生まれ変わりなのです。彼らの寿命は千歳で、死後は天界

に生まれ変わります。したがって人が死んでも悲しんだりしません。死体を奇麗に飾って街道においておくと、憂慰うれいぜんか禪ぜん伽かという鳥が来て死体を運び去り、始末してくれるのです。

さて、ここで面白いのはこの土地の性習慣です。そう身をのりださないで下さい。実は人間世界のうちでここだけは夫婦制度がなく、男女は別々のグループで生活しているのです。そこで、ある男がある女に恋したとします。男は女をじっと見詰めたのち去ってゆきます。女はその後に従って二人は林のなかに入ります。二人がもし近親の間柄で交わることで出来ない場合は、樹木はそのままでいるので二人はそのまま別れ去ります。もしそうでないときは、樹木が体を曲げて二人を覆いかくしてくれるのです。そこで二人は一日二日あるいは七日のあいだ存分に楽しみを尽くします。そして二人はさっぱりとあと腐れなく別れてゆくのです。

女性が懐妊すると七日か八日で出産します。子が生まれると女はその子を街頭に捨ててしまいます。通りがかる人たちが赤子に指をしゃぶらせると、指の先から甘い乳がでて子供を養います。こうして七日もすぎれば子供は成人して、男女それぞれのグループに入っていくのです。

ウッタラクルの欠点

以上が鬱単曰の訪問記である。多少脚色はしたけれど、内容は経典そのままである。まことに素晴らしい世界で、いかにも熱帯インドの人達が考え出した理想世界らしいが、極

楽浄土よりもこっちの方に生まれ変わりたいとお思ひの方も少なくあるまい。ところが世の中そううまくはいかない。ウツタラクルには大変な欠点があったのである。ここでは仏道を成ずることができないのである。

阿含経の別の場所や舍利弗阿毘曇論等のお経では「八難(処)」といって、仏道の修行に不適當で仏の生まれない場所を八つあげている。その中に鬱單曰も含まれているのである。すなわち、まず、地獄(修羅もふくまれる)、餓鬼、畜生の三惡道で、ここはあまりにも苦痛に満ちた世界なので仏道に入ることが出来ない。次ぎが天上界と鬱單曰である。この両者はどちらも安樂に満ちた世界なので、ついのおんぴりと日を送っているうちに寿命がつきてしまい、仏道に入るチャンスを失うのである。まことに理想世界にはとんだ落とし穴があったものである。仏道を成ずることができなければ、たとえどんな楽しい暮らしをしていても寿命がつきた後は他の世界へ生まれ変わり、いつかは惡道に落ちることを免れない。結局五趣(六道)のうち人間界でのみ仏道修行ができるわけだが、油断は禁物である。八難の残りの三つは人間界にあるのだから。すなわち、人間界でも肉体的欠陥や奢り高ぶる心やタイミングの悪さによって仏道に入るチャンスを失うこともあるというのである。俱舍論等では仏が世に現れるのは人の寿命が段々短くなる滅劫の一時期的みで、他は苦と樂のどちらかが多すぎて具合が悪い、と説いている。まことに「人の生をうくるはかたく、やがて死すべきもののいま生命あるはありがたし。正法を耳にするもかたく、諸仏の世に出でたもうもありがたし(友松円諦、仏教聖典)」なのである。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十五巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

(童)(話)(の)(世)(界)
〔Ⅲ〕

音(その三)——「ポトポトポトってなんの音」



ぬのむらてつや

ぼくは地面におちた南天の実。

そこで木の葉のおぼさんのスクスクという
声にはげまされ にわとりのコココの歌に元
気づけられて やっと芽を出したのです。

小さい芽ですが これまでになるには そ
れはたいへんでした。いまおもいだしてみても
よくここまでやってこられたなあとし
ぎです。

あのたくさんあった南天の実の中のたった
ひとつのぼくだけが ヒヨドリの口から地
面にこぼれおちて ほんとうだったらそのま
まくさってしまいか虫にたべられてしまった
でしょう。

しかし それをじっと見ていてくれた木の
葉のおぼさんが 秋になって枝からはなれた
とき風にのってぼくの上におりてくれたので

す。そのぼしょが一センチメートルちがつても ぼくとおばさんはあえなかったわけです。葉っぱの下にかくれて ぼくは安心して 冬をすごしました。それはなんともいえずにいい気持ちでしたから まるでおかあさんの腕のなかで スヤスヤと眠っている赤ん坊のようだったのです。

それも長くはつづきませんでした。

春がきたとき そばにいろはずのおばさんは 木の葉のかたちをした土と スクスクという音とをのこしてどこかへ姿をけしました。アリたちが土の上へ出ていった楽しい話もききました。そこにはたくさんのごちそうがあつて あたたかいお日さまがいっぱいにかがやいているのでそうです。

ぼくも早くそのお日さまを見たいものだとおもいました。

ところが スクスクの音といっしょに土の

中で芽を出したぼくの頭の上へ 大きな石をおいたのは人間です。

「いいかたちの石どうろうだ」

その話し声をきいたときのくやしかったこと。これでぼくは外のあかるいけしきも見られずに くらい土の中だけでおわるのかともうと涙がでた。

そのとき聞こえたのが ココココココの音。土の上でうたうオンドリ之歌でした。

「コココのコココ ここにこんなにえさあるよ。ほらほらみんな出ておいで。ここだよここだよ あつまりな。コココのコココ」

死んでしまったメンドリや もらわれていったヒナたちを呼んでいるオンドリの声でした。

ずっと前 ニワトリの家族がみんな楽しんでえさをたべていたときそのままに オンドリにはここにメンドリがいるのです。ここに

はヒナたちがいるのです。むかしと同じようにみんながここにいたのでした。これからもうずっとここにいます。

土の中にとじこめられて地上へ芽をのばすことのできない南天の実のぼくには、その歌声がかなしそうに聞こえましたが、いっぽうではさびしさをなぐさめ力づけてくれる友だちの声のようでもありました。

「ああそうだったのか。いまここががんばればいいんだ。上へのびることばかりをかんがえなくてもいい。このぼしょでできるだけのことをすればいい。ここには南天の仲間がいてくれて、ぼくを助けてくれている」

スクスク コココ

スクスク コココ

「上へのびられなかったら、ここから下へスクスクとのびればいい。下がだめなら横でいい。ぼくはのびるぞどこまでも。地面の下は

広いんだ」

こうして南天の実は、あっちにもこっちにも根をはりました。

そんなある日のことです。

根の上のあたりが急にさわがしくなりました。

「いったいなにがはじまったんだろう」

とおもっているうちに、かたくてとんがったものが土の中へズシズシとはいってききました。

やがて人の声がして

「その石どうろうのそばをほればいい。そこにはなにもないだろう」

ジャリジャリと土をほりかえしてくるのは鉄のシャベルです。しかもそのとがった先が南天の根にちかずいてくるではありませんか。かたいシャベルがやわらかい根にあたったら、せっかくのびた根はひとたまりもあり

ません。どうしたらいいのでしょうか。

「こわいよー」

にげることもできません。だんだんシャベルはちかずいてきます。ザクザクザク。

「たすけてー」

南天の実がさけんだとき　ズズズーとはいってきた鉄の先が「ブツン！」と根をきったのです。

「いたい！　ぼくは死んじゃう」

そういつたまま南天の実が気をうしなってしまうしました。

ポトポトポト　ポトポトポト

どこからか静かな声がきこえてきます。それといっしょに声がして

「ほら　しっかりしなよ。おまえはまだ死んではいないんだから」

その声で気がついた南天の実があたりを見まわすとそこにいるのは　ミミズのおじさん

です。

「一本や二本の根をきられただけでへこたれてはだめだよ。そのためにたくさんの根をのばしたんだろう。まだまだだいじょうぶだよ」
「でも　切られたところがいたいんだもの」
泣きながらいう南天の耳にさっきの音がきこえます。

ポトポト　ポトポト

「あの音は　いったいなんだろう」

ミミズのおじさんがおしえてくれました。

「あれはねシャベルで切られてしまった根っこがながしている涙さ」

「へえー、やっぱりいたいって泣いているのかな」

「そうなんだ。みんな生きたい生きたいといっているんだ。わたしはいまここにこうして生きているけれど　ほかのミミズはニワトリにたべられたり　魚のえさにするために人間

がほっていつてしまった。ポトポトという音をきくたびにわかれていったミミズがなつかしい」

おじさんは　とおいむかしをおもいだしているように　ちぢめていたからだをのぼしながらつづけるのです。

「ここにはわたしだけがのこったが　ほかのミミズたちも　もつともつといっしょに生きたかったにちがいない。それができなかったミミズの涙がわたしのまわり　をしめらせてくれている。そのおかげでわたしはぬくぬく生きていられるんだがね」

「ほんとうだ。ぼくも同じなんだね。たくさん南天の仲間が鳥にたべられたり　くさったりしてしまった。ひとつだけ残ったぼくが　やっとここで芽をだしたけど　ほかのみんなも芽を出して根をのぼしたかったんだらうね」

ポトポトポト　ポトポトポト

そのとき南天の根のあたりを　すきとおった水がやわらかくつつんでくれました。

そして上の方からも　あたたかい水がしみこんできます。それは咲こうとしてつみとられた　ハハコ草の涙なのでしょう。あるいはふみにじられた　タンポポのながす涙なのでしょう。それとも　花のさかりに切りとられたアヤメ草のこぼす涙なのでしょう。

ポトポト　ポトポト　ポトポト

南天の実は　その水を根いっぱいにするうと　石と石とのすきまをさがしながら地上へむかって芽をのぼすのでした。

外では六月のあかるい雨がふりつづいていきます。

(つづく)

好評の新刊

宮林雄彦編

『仏事と信仰生活・浄土宗』

- ◆◆◆ 浄土宗の檀信徒には必携の書!!
- ◆◆◆ 平明な記述と豊富なイラストによるあかるい装丁の本!!

四六判美装本 一四二ページ

定価八〇〇円(〒二〇〇円)

△発行・発売▽ 図書出版(有)群書

〒170 東京都豊島区巢鴨四一七一六―四〇三

TEL (〇三) 九一七一八四一一

(振替) 東東七一六八七五九

海と山の狭間で

—我が思い出に住む犬たち(13)—

木の
した
りゅう
隆
一
いち

昭和二十四年三月、生後四か月目を迎えた虎徹の動作は一段と敏捷になり、可愛さは一層増した。一日中見ていても、見飽きることはなかった。

幼いながらも、自分で考え、判断し、行動する。判断が間違っていると思えば、直ちに修正して二度と同じ過ちを繰り返さないところなど、とても子犬とは思えない見事さであった。沓脱石によじ登り、更に背伸びするようにして、爪を立てて縁側に這い上がることを覚えたのも、この頃であった。初めは沓脱に上がるのに苦労していたが、石の凹みに爪

を引っかけ、一躍で石の上に跳び乗るようになった。このパフォーマンスの成功で、虎徹は座敷へ上がることを許されたようなものであった。座敷で飼うつもりは全くなかったが、成り行きでそうなってしまったのである。地質が花崗岩質で、関東のような黒土でなかったのも、虎徹に幸いした。黴カビの汚れがそれほど目立たなかったからである。母に足を拭かせて、虎徹は嬉々として座敷を闊歩していた。

奇麗好きの貴女が座敷で犬をねえ——と母の変わり様を訝る人もいた。昔の母を知る人にしてみれば、もっともなことであつたが、戦災に遭つて一切の物を失つてから、母は変わった。大袈裟に言えば、彼女の世界観が変わつたのである。物質欲を全く無くすると、人間は愛情一途に生きるものなのかと、当時の母を回想する昨今であるが、それはともかくとして、生まれて四か月の子犬といえ、人間の年齢にすれば七、八歳ぐらいであろうか。自分の身の始末は、教えられなくても自分でつけるし、とても人間の子供の及ぶところではなかった。糞をする場所も、自分で見つけて必ずそこでしたし、そこはまた家の敷地の中で一番人目につきにくい場所でもあつた。

「賢いなあ、お前は……」

そんなことを言いながら、母が糞を集めて庭の隅に掘った穴に捨てると、何でそんなことするの？といたふりに、虎徹は顔をチョココンとかしげで、穴の中を覗き込んだりした。それがまた可愛かつた。虎徹にしてみれば、人間のすることが腑に落ちなかつたのであるが、人間に手間隙かけないように糞をする場所を穴のそばに変えるということは

しなかった。犬という動物は、糞をしているところを見られるのを極端に嫌う。偶然見かけたにしても、バツの悪そうなのか迷惑そうな顔をして目をそむけるので、できるだけ知らん顔をしてやったが、小便の方は全くおかまいなしで、決まった場所というのはなかった。大きくなってから縄張りを確保するためにする臭いづけの下地は、子犬の時すでに身につけた習わしのようなであった。

「いつになったら、後ろ足上げておしっこするようになるのかな」

ある日、私が素朴な質問をすると、母は返答に窮したが、

「王様に貰った足が、右か左か自覚するまでは無理じゃないの」と、逃げた。

名前は忘れたが、当時売れっ子だった慢才コンビのネタの一つに△王様の足▽というものがあった。犬が足を上げておしっこをするのは、王様に貰った足を汚さないためにするんだ、と一人が言えば、上げるのは右か左か、と相棒が突っ込む。すると、ぎゅっちゅの犬は左足を上げる、とまあそんな他愛のないやりとりが続くのであるが、娯楽に飢えていた時代であったとはいえ、決して上品とは言えないこのネタで、このコンビは数年間食い繋いだのだから、いかにバカ受けしたかが分かるというものだ。この慢才が成功したのは、△神様に貰った足▽とせず、王様に貰った、としたところにあったように思う。神様はオールマイティで冒し難いが、王様という存在はオールマイティのように見えても、どこか一本抜けていて、それが人間的な弱みとなって、民衆に乗ずる隙を与える。童話の「はだ

かの王様」にしても、「王様の耳」にしても然りである。ただこれらの童話は多分に西欧的な匂いがあるが、慢才がギャグに使った△王様の足▽に、何となく東洋的なものを感じるのは私だけであろうか。話の原型は、中国の古い笑話集「笑府」あたりにありそうな気がするが、まだお目にかかったことはない。

「虎徹、お前が王様に貰ったのはどっちの足だ？」

虎徹を捕まえて、後ろ足を交互に動かして聞いてみたところで、嫌がるだけで答えるはずもないのだが、私はもしかすると、漫才師が言うように、左利きの犬は左足を上げるのかな、と思ったりしたものだった。

△コテツ▽は、漢字で書くと勇壮で収まりがいいが、犬の名として呼ぶには少々難があった。強く厳しさをこめて呼ぶ時は「コテツノ」で極まるが、不断普通に呼ぶ時には、△ツ▽の音が邪魔になった。

「コテや、いっぱい食べて、おとうちゃんの手のように大きゅうおなり」

母は初めから呼びにくいと言って、△ツ▽を省いて△コテ▽と呼んでいた。「コテや」と言うのなら、「コテツ」と言ってもよさそうなものだが、愛情をこめて呼ぶと、やはりこの形に落ち着くようだった。しかし甚だしまらない呼び方ではあった。

虎徹は母の「コテや」には全く弱かった。私と遊んでいる時でも、呼ばれると動きを止めて聞き耳を立て、次の瞬間には声のした方へすっ飛んでいる。しばらくして戻ってきた虎徹に、

「ロクすっぽ耳も立ってないくせに、聞き耳立てるたあ生意気な」

と、耳を引っ張って私が言うと、しきりに首を振って逃れようとするが、そのうち、これはさきほどの遊びの続きであったかと、猛然と飛びかかってきたりするのであった。

母には甘えっ放しだったが、これは単に食物の提供者という認識だけではなく、虎徹は母の中に母性を感じていたのかも知れない。一番甘えていたくせに、母の言うことはあまり聞かなかった。その辺は人間の子供とあまり変わりなかったが、きつく叱ったりすると、必ずと喋っていいほど、母のところへ助けを求めに走った。

そして、私はと言えば、せいぜい遊び友達ぐらいにしか思っていなかったようだ。私の行くところへはどこへでもついてきたし、こちらが四つん這いになって構ってやると、向きになってかかってきたりしたが、噛まれてもちょっと血が滲む程度で、虎徹の方も遊び心を失ってはいないようであった。そんなやんちゃでだっ子の虎徹だったが、なぜか父には一目置いていた。家人の中では一緒にいる時間が一番少なかったせいもあるが、父に接する態度はどこか遠慮がちで、従順で、父の言葉を一々理解して行動しているかのようであった。

「お前より、虎徹の方がよっぽど聞き分けがいい」

と、父は私に向かってよく言ったものだった。

家長に対する礼を、子犬が弁えていたとは思えないが、虎徹を見ていると、ひょっとすると、こいつ天才かも知れんぞ、そして人間以上に人情の機微を心得ているんじゃないか

と思えてくるのであった。

「天才の犬なんてのはぞっとしないが、もしそうなら、お前早や死にするなよ。もっと馬鹿になれ、馬鹿に！」

と、時々頭を小突いて言い聞かせたが、私の言葉は一向に理解しないふうで、手を噛まれるのがおちだった。

時しも啓蟄の候。虎徹の興味を引くには十分すぎる程の、様々な虫が地面を這っていた。とりわけ虎徹が関心を示したのは、タマヤスデと大きな黒蟻だった。タマヤスデは触るとまるまって動きを止めるのが不思議でならなかったようだが、動かないものには興味がないらしく、すぐ見向きもしなくなった。

ある朝、日溜りの中で、虎徹は腹這いになって前足で何か捕えようとしていたが、なかなかうまくいかないらしく、とうとうじれて吠え出した。黒蟻を捕えようとしていたのであった。足首だけ動かして押えればいいものを、肩の付け根から持ち上げて、足全体を動かすものだから、動きが鈍くなり、それだけ対応が遅れるのは当然で、ヨッコラシヨ、パタンと押えた時、動きの速い黒蟻がそこにいるわけではない。そのうち自分では動かず、蟻が近づいてくるのを待つようになった。半眼を閉じて、お前なんか知らないよといったふうに装いながら、横目で蟻の動きを監視しているのがおかしかったが、犬は待つという狩猟の心得を、こんな些細なことから学ぶのかと感心させられた。やっと押えて、勝ち誇ったように鼻を近づけたまではよかったが、虎徹は大きなくしゃみをして飛びのいた。

◎「浄土」表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん}
弘^ぐ
の
生
涯
(六)

——大僧正岩井智海伝——

松^{まつ}
浦^{うら}
行^{ぎょう}
真^{しん}

蓄積の日々

先にも引用したが、岩井智海大僧正の最後

の著書となった『道しるべ』は、著者が東京の回向院で口演した「十重禁戒講話」をはじめ、「仏教音楽論」や「日清戦役外征軍慰問通信文」といった、ちょっと珍しい文章など

もおさめた書物だが、その巻末には著者の小伝も掲載されている。それには彼の修行と修学ぶりが、つぎのように記載されている。

『明治十三年師十八歳の時、笈きふを負おふて上京し、知恩院浄土宗大学林にて浄土宗義ぎの研鑽けんさんに努め、更に同十七年、大阪市居留地英和学舎（校長米国人チング氏）に入學しその業を卒はふるや、更に東京市築地新栄町の私立立教大学選拔生に合格、籍を立教大学に進む。……』（道しるべ）

本来なら岩井智海は東京の芝・増上寺に留學し、関東十八檀林のうちのどこかに配属されて、そこで学ぶはずだったのである。

というのは宗侶の教育と伝法は、徳川幕府が江戸にできる以前から関東十八檀林が掌握する慣例になっていて、増上寺がその首座と

して事に当ってきただけである。

じっさい増上寺は、大檀家である家康が江戸入りしてからは、そのお声がかかりで七堂伽藍の大造営が行われ、権限も浄土宗の総録所として一宗の行政を総括するというふうに強化されて、明治にいたった。しかしその幕府が崩壊してしまふと、例の神仏分離令も大きく影響して、大殿だいでん（本堂）は神仏合併の大教院にさせられるわ、おまけにそれを不満とする何者かの放火によってその大殿が炎上するわで、経済的にもとんと落ちこむことになってしまった。そこで活路を将来に開いておこうと明治六年、増上寺は伝統的にもつ権限のなから、

——伝法権を、総本山知恩院以下、金戒光明寺、知恩寺、清浄華院の三大本山へ割譲するから、それと引きかえに増上寺にも「大本山」という称号を使わせ

てもらいたい。

と、知恩院に申しでたのである。この当時、増上寺は行政の総録所ではあったが、大本山ではなかった。

しかし実際にその申し出が実現するには、二年の歳月がかかった。例によってスツタモンダが起きたからだ、それでも結局実現したのは、割譲申し出に連署した当時の伝通院住職・養鷗徹定が、その間に政府人事で知恩院の住職に栄転したことが一つ。もう一つは知恩院が近畿および西国の寺々から、京都でも宗・戒兩脈の伝法を受けられるようにしてくれと、突き上げられたことによる。この兩脈を受けないことには、どんな英才でも、浄土宗侶となることはできないのだから、費用の点からも西国の寺院が、弟子の受戒をなるべく近くで行わせたいと願うのは、ごく自然なことといわねばならない。

割譲の申し出受諾とともに知恩院では、その機能を果たすべく、大わらわで山内の入信院に総本山勸学本場を設けるやら、講師を選定するやらの動きとなった。明治十三年に智海が入学したのは、その勸学本場であった。のちにこれが西部宗学本校となり、さらに浄土宗西部大学林へと脱皮してゆく。冒頭の小伝にある「知恩院浄土宗大学林」というのはこれである。

岩井智海は入学した年の十一月に戒脈を、翌明治十四年十一月には同じく宗脈を、ともに知恩院第七十五世順譽徹定大教正から相承した。

さらに二年後、本来、彼は学業を終えれば福岡へ帰るべきところだったのだが、意外にも大阪にあったキリスト教系の英和学舎に入

学することになる。

これには、事情がなければならない。

じつは大学林に在学中に、境誉見明和尚の法弟であり、かつ養子であったにもかかわらず智海が、成道寺の相統権を放棄したのである。

というのはその間に、師匠が妻を迎えたことによって事情が一変したからである。婦人は再婚で、しかも先夫とのあいだにできた男の子をつれて嫁してきていた。その男の子は筑紫隆雄といい、そのときまだ三歳の幼児であったが、いずれは境誉見明の弟子となり、仏の道に入ることになるであろう。

智海がそれらの経緯をどんな形で知ったかについては、何も書き残されたものがないので、わからない。書信で知ったのかもしれないし、たまたま福岡に帰省の折り（そういう機会があったことだが）、師匠から打ち明

けられたのかもしれない。いずれにしても弟子が師匠の心中を推し量り、義理と人情のはざまでゆらゆら揺れながら、懊悩したすえの結論が、「どうぞ寺は弟弟子につがせてやってください」ということであつたことだけは、確かである。

しかしそのことが原因で、師匠との仲が特別にまづくなつた、ということとはなかつたようだ。筆者は昨年（昭和六十三年）、山田智旭師とともに福岡市中央区唐人町の成道寺をたずねたが、境内の一角に、智海大僧正の法名を彫りつけた大きな墓石がたっており、略歴を刻んだ碑文もあるのを見て、何となく心がほぐれ、なごむのを覚えた。

成道寺は、想像したよりも大きな寺であつた。境内はざつと二千坪（六六〇〇平方メートル）、外陣だけでも七十畳敷きという大きな伽藍を擁していた。応対をしてくださつた住

職は佐藤隆昭師といい、京都の出身ということであつた。成道寺十六世の岩井の師は大正元年十月六日、八十歳で遷化し、法名を「淨蓮社大僧都境上人真阿智嶽見明老和尚」というが、その境上人から数えて、十七世隆雄、十八世隆成、十九世佐藤玄隆、そして二十世の隆昭師にいたるのである。

話題をもとにもどそう。

相続権を放棄したことによって、卑俗な言葉でいえば、智海はみずから二階にのぼって梯子をはずしたのと同様の形となつた。貧困はたちまち彼の生活を見舞い、小伝は前記につづいて、

『此の間、赤貧洗ふが如く、学資金の調達も意の如くならず、常に貧困と戦ひ乍ら勉学に専念されしが、幸筑後の人本莊堅宏氏の知遇援助を得て感奮勉勵其の学

業を卒へるを得たり』(「道しるべ」)

と記している。

伝記類を読んでいつも思うのだが、どうにもならない窮状に陥つたかと思うと援助者が現われるというのは、むしろ「立志伝中の人」と呼ばれる人たちに共通して見られる現象のようである。一つにはそういう強運にささえられるからこそ、名を残すほどにそれぞれの道で、志をとげることができたのかもしれない。岩井智海もまたその一人であつたわけだが、こののち上京して、今の東京芸術大学の前身の一つである上野の音楽学校に入學することになったときも、やはり後援者が現われている。

それはともかく、糧道を絶たれるような境遇に陥りながらも、彼は少しもひるまず、むしろ「布教師」というターゲットにむかつて、

さらに闘志を燃やしているのである。

その端的な表われが、「英和学舎」に入学したことにしている。

じつは筆者は、浄土宗の宗学校から一転してミッションスクールに向かうとはどういうことであろうと、当初、奇妙の感をいだいた。というのも、例の神仏分離令を発端とする騒ぎのなかで、仏教側はその有用性を政府に認めさせる根拠の一つとして、キリスト教に対抗しうる宗教性と哲学性をもつものは、この日本においては仏教しかないではないかと、政府に迫っていたからである。

この思惑は、官僚たちにも等しいものがあった。神道色のついた者やそのシンパサイザーたちがしだいに中央政府から追い出され、かわってそのポストについた官僚たちが「仏教肯定」に切り替えていったことも、一つにはやはり仏教を、キリスト教への防波堤にし

ようという意図があったのである。

いってみれば、耶蘇教（キリスト教）を敵視することにかけは双方とも「相身互い」みたいなところがあったわけだが、これは徳川政府が初期いらい長年にわたって施行してきた「切支丹禁制」がついに風習化し、それにもとづくところの感覚的な忌避が多分にあつたからであることはいうまでもない。

しかし諸外国の日本にたいする「切支丹解禁」の迫り方にはものすごいものがあり、明治政府にとつても旧幕府から引き継いだ宿題の一つだったから、そういつまでも禁制をつづけていられるわけがない。幕府が結んだ不平等条約を改定したいという思惑もあつて、ついに日本政府は明治六年、キリスト教を解禁した。智海の教導職試験に先立つこと近々二年、英和学舎の入学から数えるなら、十年前に相当する。

筆者の疑問には、そういう背景があった。

しかしよくよく考察してみれば、これこそこの人物のユニークなところなのであった。

十年という歳月は、見方をかえれば、人間を冷静な観察者とするに充分な時間、といえるかもしれないが、ともあれ彼は遠大というか深謀というか、じつはミッシェンスクールに学ぶことで、キリスト教の伝導法というものを探求しようとしたのだった。おそらく智海は、そこに欧米の近代的な手法の匂いみたいなものを、感じとっていたにちがいない。^(註1)西南戦争の終結は「明治維新」という一つの時代の終焉^{しゅうえん}でもあったが、折りから時流は一新して、文明開化の盛りにむかって進行していた。

視点をそこにおくと、岩井智海という人物の行動には、見事な一貫性が浮かびあがってくる。英和学舎から立教大学（正しくは「その

前身」にすすみ、さらに文部省直轄の音楽学校に学んだのも、すべては布教―伝導という一線上にいらんだ「修業の道場」、くだいていうなら「仕込みの場」なのであった。

それはまず、大阪居留地の英和学舎で西洋の文化に触れて理解の端緒をつかみ、ついで立教大学にすすんで西欧式伝導の知識と實際を吸収し、そこで接した讃美歌をはじめとする宗教音楽から、その有効性とわかりやすさを感じて、それがやがて音楽学校への入学につながっていく――と、こういう流れになるのだ。

その間の消息を、小伝は、

『……師はキリスト教義の本質を極め、其の長を取り短を捨てとって以って仏教徒他山の石としてキリスト教学習より大いに得る所多かりき』（「道しるべ」）

と伝えている。

このなかの「英和学舎」にまつわっては、いかにも伝記作者なら重宝しなければならぬような挿話がある。筆者が取材した山田智旭師の談話で、それを記しておこう。

『「道しるべ」の小伝に、「明治十七年、英和学舎に入学」とあるでしょう。これが面白いんです。ついこの間ここ（注・山田師の住職する堺市の大阿弥陀経寺）へ、この寺の歴史を調べに桃山学院大学経営学部長の中田信正先生たち数人が訪ねてくれた。なかに飯島伸子という女性の教授がおられて、その飯島先生が師匠の略歴を見て「おや」というんですね。「なんですか」ちゅうたら「桃山学院高等学校は明治十七年には英和学舎というておっ

た」というわけですよ。「学校と学舎のちがいはあるが、〃居留地にあった英和学舎に入学した〃というんだから、私の学校の前身に間違いない……」。当時は一般の学校というよりも英語学校的な存在だったらしいんですが、しかも師匠はここを出て、立教大学に行つとるでしょう。立教と桃山は同じキリスト教の系統で、関係が深い。「不思議な縁や」というて、桃山大学の先生も驚いていました』（山田智旭談話）

桃山学院高等学校と同大学は戦後の設立だが、旧制中学は大阪東区の大手町に古くからあり、大阪人には桃山学院の名で親しまれた学校である。しかし「英和学舎」となったら、これはもうとんとわからない。もしこの挿話のようなことがなかったら、筆者はその詮索

にひと苦勞しなければならぬところであつた。取材を予期したような教授の大阿弥陀經寺來訪はもちろん偶然ではあるが、何かの因縁と思えばそうともいえる。

智海は十九年にここを卒業して翌二十年に上京し、築地明石町にあつたミツツヨンスクールに進むのだが、もちろん当時はまだ「立教」とはいわなかつたし、大学でもなく、聖パウロ学校という名の一私塾であつた。

この学校は明治七年にアメリカの聖公会から派遣されたC・M・チャールズ主教が創立した。現在の豊島区池袋に移転して立教大学となつたのは大正七年（一九一八）のことである。

智海はその聖パウロ学校へ、選拔生として入つたというのだから、山田師のいうとおり桃山学院とは系統を同じくするミッションスクールだったから、成績をかわれて桃山から

推薦があつたのかもしれない。

ところでこう書いてくると、彼の仏教のほうの研鑽ないし教養は、知恩院の浄土宗大学林どまりかと思われそうだが、決してそうではない。

『明治廿三年現東洋大学の前身なる哲学館が当時のあらゆる学者を網羅して、東京市本郷に井上円了氏に依り創立せられるや、師は転じて茲に入学し其の学業を了り一方浄土宗本校、即ち現大正大学の前身が創立せられ、黒田真洞氏初代校長となられるや、師は黒田氏母堂の理解知遇を得、学資の援助を申出られしを以て、師は浄土宗本校に於て更に宗乗、余乗を研鑽することを得られたり』（道しるべ）

明治二十三年といえは智海二十八歳である。この前年には音楽学校へ入学し、また文教区小石川の景久院に入り、はじめて住職を経験しているのだが、どういうわけか一年前後で、景久院のほうは退山している。

音楽学校の卒業は二十四年で、二十五年はひきつづき東京住まい、そして二十六年には京都府天田郡福知山町（現在は市）の法鷲寺住職として、東京を去ってゆく。

これらの略歴を、すでに記した小伝の内容と重ね合わせると、二十年の上京から二十六年の退京までの七年間に、彼は聖パウロ学校に通い、終わると音楽学校に学び、その一方で哲学館と大正大学の前身である浄土宗本校で仏教を学んだということになる。これだけでももう並みをはるかに超える勉強である。この向上心にはただ脱帽のほかはないが、同時にまたこれでは「蓄積」に全精力をそそぐ

ことになって、とても住職などしているといまはなかったのかもしれない。

さて小伝は、いよいよ筆をその音楽学校時代にすすめてゆく。

『……師は夙に少年伝導の^{ゆゑ}にすべからざる事を痛感し、而も少年伝導を^な為すには仏教音楽を以て仏教的情操を与ふるの効果顯著なるを信ずる所ありしが、當時唱歌音楽は我国に於ては未発達の状態にして、小学校に於ける唱歌の教師すら未だ以て全国に行き^{わた}らず、されば世の唱歌の教師を^{くづ}屈請して少年伝導を為すの希望は断たれたり。依って師は自ら音楽学校に入学して自ら音楽を^し学ぶに若かずと深く決する所ありて文部省直轄音楽学校長伊澤修二氏の^{しよくちう}懇意に依り、明治廿二年九月に東京の文部省直轄音楽学校に入

学し、同廿四年七月まで音楽を修得せり『(道しるべ)』

この世において、人間関係の大切さはいうまでもない。事をなそうと思えばなおさらで、それをおろそかにして成功したためしは、まず、ないといつていい。

この鉄則は僧俗を問わず、あてはまる。

人は自分独りで生きているものではないからである。

このことを繰返し説くのは仏教の一側面でもあるが、それにしてもまだ二十代の若輩にすぎない岩井智海（いゑい ちゑ）の、この見事な人間関係はどうであらう。

これは単に社交とか接触ぶりとかでもたられるものではない。それを超えている。おそらく彼自身のもつ、将来の開花を思わせる才能が随所に発揮されて、人々に「期待でき

る人物」とはつきり感得されたからではないか。

もしここで彼の幸運を挙げるとすれば、明治という時代がまた「期待できる人物」を待望していたという一点であらう。

仏教音楽についても、

『……大内青密居士（おほうちのせいもん）等の有志と相謀り、東京に仏歌唱会なるものを組織し、布教上応用す可き音楽唱歌を大成せんことを期し、日夜之が研究に従事せり。明治廿七年には京都法蔵館より仏教音楽論を発表し、同年には同じく法蔵館より師の撰曲（せんきょく）に係る仏歌唱集数編を岩井一水の楽名を以て発表せるが、蓋しこの種の仏歌唱（ぶつかがう）としては此を以て嚆矢（こうし）とす可きものならん』(道しるべ)

といった具合なのである。大内青巒は明治期、在家の仏教指導者として高名で、のち大正の初年には東洋大学の学長となったほどの人物である。智海はおそらく井上円了を通じて知ったのであろう。仏教唱歌会の結成を明治二十五年とするなら、大内はこのとき数えの四十八歳、智海よりも十八年の年長であった。

(つづく)

(注1) 西南戦争は明治十年(一八七七)におきた、西郷隆盛を中心とする鹿児島土族の反政府暴動をいう。明治政府の欧化政策や土族解体策に反対して下野した西郷は鹿児島に私学校を開いたが、思いを同じくする私学校生徒や土族に擁されて二月、熊本城攻撃で戦端を開いた。明治政府は徴兵令による軍隊で鎮

庄にかかり、九月二十四日までに西郷軍の指導者は戦死または自刃して終結した。保守派土族の最後の抵抗といわれる。

(注2)

大内青巒(一八四五—一九一八)。仙台藩士の家に生まれたが、水戸にでて曾洞宗の僧となり、のち還俗して西本願寺法主光尊の侍講、また新聞「明教新法」を発刊。明治十二年には仏教各宗の連絡団体「和敬会」を組織、また社会事業にも尽力するほか、仏教講演、精神講話など仏教運動家として活躍。キリスト教排撃の旗頭でもあった。大正三年(一九一四)東洋大学長に。

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十五巻 六月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成元年 五月二十五日 印刷

平成元年 六月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒102 振替東京八一八二一八七番

◇ ◇ ◇ 新刊紹介 ◇ ◇ ◇

寺内大吉のライフワーク

寺内大吉 著

『立ち止まるな善導』

歴史像でとらえた念仏者・善導!!

法然「偏に善導一師に依る」、親鸞「善導独り仏の正意を明かせり」。日本浄土教に決定的影響を与えた中国唐代の念仏僧と時代背景を描く——好評の本誌連載の長編!!

A5変型 四七四ページ 定価一八〇〇円

《発行・発売》

毎日新聞社

〒100-51 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

TEL (03) 2211-0311

第五十五卷

六月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成元年五月二十五日印刷 平成元年六月一日発行